

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究 (6)

— 1950年代 (その2) —

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みをなし、そしてそれにつづいて、本誌第5巻第2号では1950年代に海外において発表された諸研究のうちの一部としてJ.F.ベル、J.A.シュムペーター、J.P.ヘンダーソン、R.L.ミークの研究の内容を整理する試みをなした。本稿は前稿にひきつづいて1950年代に海外で発表されかつわたくしがみることのできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する個々の研究の内容を整理しようとするものであり、具体的には、1950年代に発表されたE.ジャム、H.M.ロバートソンとW.L.テイラー、L.ロビンズ、S.アムビラヤン、R.ルカッチマン、D.F.ゴードン、M.ブローグの所論を整理しようとするものである*。

* 諸研究の発表年度の区分は、本稿にさきだつ諸稿と同様、原則として、著書の場合には、その原版もしくは初版が出版された年度に、あるいはその最初の著作権が成立した年度に、そして、論文の場合には、それが最初に書物あるいは雑誌に掲載された年度に、したがった。ただし、本稿で使用した文献は、必ずしも原版、初版のものではない。

(1) E. ジャム (1956)

まず、ジャムによれば、スミスは富裕のうちに金属の蓄積をみないで、「生活のあらゆる必需品と便益品」の蓄積をみ、また、そのような意味での国民の富がもたらされる「元本」^{フナド}は土地ではなくて国民の労働であると、そして、このような考えをいなくスミスは「労働だけが、それ自身の価値がけっして変動することのないために、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準^{スタンダード}である」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited……by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library <New York: Random House, c 1937> ——以下 W.N. と略記する——, p. 33. 大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, 1976年——以下, 大河内訳<Ⅰ>, <Ⅱ>, <Ⅲ>と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——, <Ⅰ>58ページ。)として労働を価値の最善の尺度とするのであるが, これは, 重商主義的な考えをもつ18世紀のあまりにも熱心な金属主義者たちすなわちスミスが可變的尺度を推奨していると非難した人々, および, 小麦を基本の尺度とみなそうと考えている人々にたいする, 附隨的な答弁¹⁾なのであった, とされる。

1) エミール・ジャム著, 久保田明光, 山川義雄訳『経済思想史』<上, 下> (フランス語原本の初版は1956年。この邦訳は1959年の第2版の訳), 岩波書店, 1965—1967年, <上>, 114—116ページ。なお, ジャムは, 以上のような指摘につづいて, 「しかし労働は価値の原因なのであろうか。不幸なことに, この大問題についてのスミスの取扱いは, はなはだ拙劣であった。彼はまずはじめに, 『価値』という言葉はつぎの二つの意味をもっている, ということを指摘している。すなわち, あるときには, それはそれぞれの物の有用性を考慮した, 一物の他物に比較しての評価を示し, あるときには, それは評価された物の所有によって与えられる, 他財を購買する力を表わす, と。かくしてスミスはその当時の多くの著者たちにならって, 『使用価値』と『交換価値』とを区別した。彼は…〔水とダイヤモンドの例を用いながら『価値のパラドックス』について〕付言している。……しかし彼は, 『価値

のパラドックス』にはほとんど注意をはらわなかった。彼にとっての主要な問題は、交換価値の問題であった。すなわち、交換価値は市場において何に依存するのか、ということであった」とし、以下、交換価値の決定あるいは規制の問題に関するものとしてのスミスの議論を検討している（上掲訳書、116—118ページ。〔 〕内は中川。）。このことから、ジャムがスミスの議論における「価値尺度の問題」と「価値の原因、価値の決定の問題」との論理的な関係についてどのような考えをもっているのかということは明らかではないが、少なくとも、ジャムは、価値尺度についてのスミスの議論と、価値の原因、価値の決定についてのスミスの議論とを、区別している、といえるであろう。

(2) H.M.ロバートソンとW.L.テイラー（1957）

つぎに、ロバートソンとテイラーは、スミスの議論における「使用価値」を「効用」、²⁾「交換価値」を「価値」としてとらえ、また、『国富論』におけるスミスの注意は市場価格の一時的な決定ということよりもむしろ諸国民の富の諸変動の諸原因についての長期的な説明ということに向けられていた、とするのであるが、³⁾彼らは、『国富論』における価値尺度に関するスミスの議論に関連して、つぎのような見方をしている、といえる。

①『国富論』においてスミスは、物質的厚生 (material welfare) にたいする社会および社会的諸制度の影響を研究していたのであり、彼は、一人当たり実質国民所得を決定する社会的諸原因に関心をいただいていたのであり、そして『国富論』は実際にそのような問題を考察するものとして構築されていたのであるが、このような意図およびそれを具体化した『国富論』の構造⁴⁾ということから、諸国民の「富」および特にその増進をリアル・タームで測定するために、経時的な確固たる比較を可能にするようななんらかの⁵⁾不変の価値標準^{スタンダード}が必要となった。

②スミスは、貨幣でよりもむしろ穀物で長期の計算をすることの好都合さを論じた。そしてそれは、穀物のほうがヨリいっそうそれ自体の価値の安定性を維持し⁶⁾そうである、という根拠によるものであった。

③しかしながら、不変の価値標準を見つけ出すという問題に対する解答

としては、スミスは、「労働」を全面的に支持した。そうすることに対してスミスが与えている理由は、明らかに、労働の不効用あるいは労働の⁷⁾ リアル・コストに関するある一定の心理的な仮定に基づいており、そしてその仮定は、たしかに、不正確なものである。⁸⁾

④スミスは不変の価値標準を労働に求めるのであるが、そのさい彼は、たんなる労働ではなく、市場において支配される労働の量を、全面的に支持している。⁹⁾

⑤ところで、労働者にとって彼の労働の真実費用はつねに同一のままであるということに関するスミスの諸仮定のもとでは、支配される労働量は価値の標準尺度を提供したであろうけれども、このことは、価値を決定するものは何かという問題とは関係のないものとみなされなければならない。というのは、何故にある品物の価格はある所与の労働量を支配するようなものであるべきなのかということに関しては、いかなる満足のいく説明も提供されないからである。ところがスミスは、このような意味で価値の尺度の問題と価値決定の問題とは異なる性質のものであるにもかかわらず、別の道すじで「労働」を正常な価値あるいは「自然的な」価値の問題に結びつけようという試みによって、これら二つの問題の異なる性質を不明瞭にしてしまった。¹⁰⁾

⑥しかしながら、このような難点が存在するとはいえ、スミスは、彼の「支配される労働」という尺度を、諸国民の富の本質と諸原因についての真の探究という経済学の発展に寄与した『国富論』の試みのための、ひとつの用具として使用しようとしたのであり、そして事実、その尺度は、実質国民所得の測定のための、あるいは、生産高の変化を厚生の変化と関連づけるための、土台を、提供したのである。¹¹⁾

2) H. M. Robertson and W. L. Taylor, "Adam Smith's Approach to the Theory of Value", in Joseph J. Spengler and William R. Allen eds., *Essays in Economic Thought: Aristotle to Marshall* (Chicago: Rand McNally & Co., c. 1960) [reprinted from *Economic Journal*, vol. 67 (no. 266, June 1957), pp. 181-198.]
—以下 Robertson and Taylor [1957] と略記する—, p. 290.

- 3) Robertson and Taylor [1957], p. 298.
- 4) このことについてのロバートソンとテイラーの説明については、Robertson and Taylor [1957], pp. 298-299 を見よ。
- 5) Robertson and Taylor [1957], p. 299. なお、ロバートソンとテイラーによれば、スミスの『グラスゴー大学講義』のなかにはハチスンらから受け継がれた「稀少性」および「有用性」という概念に基づく価値の問題へのアプローチが見出されるのであるが、スミスは『国富論』において、稀少性および有用性といった考えを棄てたり市場の諸力を除外したりしたわけではないが価値に対する彼のアプローチの力点という点で、「労働」および「生産費」を強調する方向へと向かった、とされる。そして、ロバートソンとテイラーは、スミスがそうしたことの大きな理由は、スミスは『国富論』において彼の注意を諸国民の富の変動の原因の長期的な説明、物質的厚生にたいする社会および社会的諸制度の影響、一人当たり実質国民所得を決定する諸原因といった問題に向けたことにある、とみている。すなわち、そのような問題を考察するにあたっては、諸国民の富およびその変化の測定ということが必要となるのであるが、「稀少性」および「有用性」といった概念に基づく価値の問題へのハチスンらのまたそれを受け継いだスミスの初期のアプローチから説明される市場価格、すなわち、市場におけるつかの間の気まぐれや流行に、供給と需要との間の一時的な諸関係に依存する市場価格は、リアル・タームでの、諸国民の「富」の測定およびその異時点間の比較という目的のためには満足はいくものではないと思われた、というのである。Robertson and Taylor [1957], pp. 288-301.
- 6) Robertson and Taylor [1957], p. 300.
- 7) 不変の価値標準として労働を選んだことにたいしてスミス自身が与えている理由を示すものとして、ロバートソンとテイラーは、『国富論』のつぎのような文章を引用している。「ところで、人間の足の大きさとか、一尋^{ひろ}の長さとか、一握りの量とか、というようなそれ自身の量がたえず変動する量の尺度は、けっして他の量の正確な尺度とはなりえない。それと同じように、それ自身の価値がたえず変動するような商品も、他の諸商品の価値の正確な尺度とは、けっしてなりえない。等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものといえることができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼は、等量の労働にたいしてはつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一量を犠牲にしなければならない。彼が支払う価格は、それと引換えに受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働が購買するのは、これらの財貨のうちより大きな分量のこともあれば、より小さい分量のこともあろう。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。時と場所のいかんを問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは、高価であり、ま

た容易に入手できるもの、すなわちわずかの労働で入手できるものは、安価である。それゆえ労働だけが、それ自身の価値がけっして変動することのないために、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格にすぎないのである。」(W. N., pp. 32-33. 大河内訳< I >57-58ページ。) Robertson and Taylor [1957], p. 300.

8) Robertson and Taylor [1957], p. 300.

9) Robertson and Taylor [1957], pp. 300-301. なお、ロバートソンとテイラーは、スミスがそのような主張をなしているものとして、本稿注7でみたスミスの文章と、つぎのような『国富論』におけるスミスの文章をあげている。「あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。……その貨幣、またはそれらの財貨は……ある一定量の労働の価値を含んでおり、その一定量の労働の価値を我々は、そのとき、それと等しい労働量の価値を含んでいるとみなされるものと交換するのである。……世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(W. N., pp. 30-31. 大河内訳< I >52-53ページ。傍点の付されている箇所は、ロバートソンとテイラーがイタリック体にしてある箇所。) Robertson and Taylor [1957], p. 301.

10) Robertson and Taylor [1957], p. 301. なお、ロバートソンとテイラーは、スミスのその試みにおいては、未開社会という単純化されたモデルからより発達した社会という現実的なモデルへの非論理的な移転が試みられた、とし、さらにつぎのような説明をくわえている。それによれば、商品の「自然」価格の、すなわち市場への供給の継続を確実なものにするのに必要な総要素支払いに等しい商品の「自然」価格の、諸構成部分の評価ということにさいして、スミスは、生産に費やされるあるいは生産に体化される労働の量を未開社会における商品の特定の価値の唯一のよりどころとしたのにたいしより発達した社会の場合には、それに加えて、「自然的な」利潤と「自然的な」地代が付け加えられなければならない、とした。しかしながら、彼は、これらの付加されるべき諸要因についてのいかなる満足のいく説明をも与えはしなかった。またスミスはここに、リカードウ(リカードウは、スミスの意図に関して、ここで提示された見解とは違った見解を持っていたように思える)が論理的に一貫したものにしようとしてかえっていっそう混乱をひどくさせるようになってしまったところの混乱状態を、残すこととなった。Robertson and Taylor [1957], p. 301.

11) Robertson and Taylor [1957], pp. 301-302. なお、ロバートソンとテイラーは、

つぎのような説明を加えている。それによれば、異なる国々における一人当りの相対的な経済的厚生を測定しようといういくつかの工夫に富んだ試みは、結局のところ、「支配される労働」というスミスの測定尺度のたんなる洗練化にすぎないということがわかるかもしれない。たとえば、もし人がコーリン・クラークの「国際単位」のタームで比較実質所得の測定を試みたとすれば、労働の所得を、1925年から1934年の期間にもとづく一定のドル価格で評価された商品バスケットのタームで、評価するということになるであろう。これは、諸商品とそれと交換できる労働とを結びつけるスミスによって提出された関係に依する、逆の関係であるにすぎない。だが、人は、たんに我々にはできないのだといった態度をとることで満足している人々にたいするクラークのいら立たしさということには、共感することもできる。Robertson and Taylor [1957], p. 304n. 39.

またロバートソンとテイラーは、つぎのような指摘をなしている。すなわち、「彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、その人間の労働の生産高は、彼が労働はうんざりするものであると考えるということによって制限されるということは、ありうるのではないであろうか。」Robertson and Taylor, [1957], p. 302.

(3) L. ロビンス (1958)

他方、ロビンスはつぎのような見解を示している。

①いづれにせよ古典派の議論に関するかぎり、価値尺度として労働を使用するという考えは、『国富論』にさかのぼる。その第1篇第5章において、「労働は……すべての商品の交換価値の真の尺度である」(W. N., p. 30. 大河内訳< I >52ページ。)と述べられている。¹²⁾

②しかしながら、スミスによるこの考えの展開はあいまいなものであった。彼は、彼の尺度を、ある商品がそれを生産するのに費やさせるところの労働の量というタームと、その商品が交換において支配するであろう労働の量というタームの両方のタームで、語ったのであった。ところで、これらの概念は同一のものではないということは明らかである。ある商品と交換される労働の量が広範囲にわたって変動するときにも、その商品が費やさせる労働の量は一定に留まるかもしれないのである。¹³⁾

12) Lionel Robbins, *Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics*

(London: Macmillan & Co., 1958) —以下 Robbins [1958] と略記する—, p. 67.

- 13) Robbins [1958], p. 67. なお、ロビンズは以上で見た見解を上掲書の第3章第7節(b)「価値の尺度」の中で示しているのであるが、それにさきだつ同じ節の(a)「価値の原因」(‘*The Cause of Value*’)において、スミスの議論にも言及しつつ価値の決定因に関する問題を取り扱っている。このことからして、スミスの議論自体における「価値の原因、価値の決定」の問題と「価値の尺度」の問題との関係についてのロビンズの見方ということはともかくとして、少なくとも、ロビンズ自身はそれらの問題を別のものとしてとらえ、スミスの議論についてもそのような視点に立って言及している、といえよう。

(4) S. アムビラヤン (1959)

アムビラヤンによれば、『国富論』におけるスミスの価値論は「使用価値」と他財貨にたいする購買力としての「交換価値」との区別からはじまるのであり、またスミスは分析の対象を交換価値に限定するとともに一国の富を交換価値をもつ事物に限定した、とされるのであるが、¹⁴⁾アムビラヤンは、スミスの価値論を、「自然価格」と「市場価格」に関するものとしての価格決定についての議論と、価格の背後に存在しそして価格によって表現されるものとしての(交換)価値についての議論とに分けて考察し、¹⁵⁾そしてさらに後者の問題についてのスミスの議論を、価値の源泉^{ソース}および価値の尺度に関するものとしてとらえて、つぎのような指摘をなしている。

①スミスは、労働がすべての富の(したがってまた交換価値の)源泉¹⁶⁾であるとした。他方、価値の尺度については、スミスは、金や銀は価値の変動にさらされるものとして却下し、労働は最も重要な生産者でありまた事物の費用あるいは代価^{プライス}の尺度であるものはその事物を獲得することの労苦と骨折りであるということから、労働こそが「すべての商品の交換価値の真の尺度」(W. N., p. 30. 大河内訳<I>52ページ。)である、とした。¹⁷⁾

②しかしながら、スミスの議論には、「投下労働価値説」(the embodied labour theory of value)と「支配労働価値説」(the commanded labour theory of value)という二種類の労働価値説が存在するのである。「投下労働

働価値説」によれば商品の価値は、その商品の生産に費やされる労働量に対応する。¹⁸⁾だが、文明化が進むにつれて、労働は唯一の価値尺度ではなくなるであろう。商品の価値は、労働者に対してだけでなく資本家に対してもなされなければならない諸支払いの総計を含むのである。¹⁹⁾ここでは、投下労働価値説は適用できないであろう、そして、なんらかの商品を所有するがそれを他の商品と交換することを欲する人物にとってのその商品の価値は、「その商品で彼が購買または支配できる他人の労働の量に等しい」(W. N., p. 30. 大河内訳< I >52ページ。)こととなる。未開社会では、支配される労働と体化される労働とは等しかったにちがいない、しかし、文明化の進行とともに、企業家 (entrepreneur)²⁰⁾ の用役が報酬^{サービス}を与えられなければならないであろうがゆえに、したがってまた支配される労働は、労働費用と企業家の費用に等しくなるであろうがゆえに、支配される労働は体化される労働よりも大きくなるであろう。²¹⁾

- 14) S. Ambirajan, *Malthus and Classical Economics* (Bombay-7: Popular Book Depot, 1959) —以下 Ambirajan [1959] と略記する—, pp. 97-98.
- 15) 前者の議論についてのアムビラヤンによる考察については、Ambirajan [1959], pp. 98-100 を見よ。
- 16) Ambirajan [1959], p. 100. アムビラヤンによれば、重農主義者がすべての富の源泉を土地と考えたのにたいしスミスは労働のみが生産力をもつと考えたのであり、事実、『国富論』は「国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを本来的に供給する源である」(W. N., p. 1vii. 大河内訳< I >1ページ。)ではじまっている、とされる。Ambirajan [1959], p. 98.
- 17) Ambirajan [1959], p. 100.
- 18) アムビラヤンはつぎのようなスミスの文章を引用している。「資本の蓄積^{ストック}と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態のもとにおいては、種々の物の獲得に必要な労働量の比率が、これらの物を相互に交換するためのルールを可能とする唯一の事情であったと思われる。」(W. N., p. 47. 大河内訳< I >80ページ。) Ambirajan [1959], p. 100.
- 19) このことを示すものとしてアムビラヤンはつぎのようなスミスの文章を引用している。分業と資本^{ストック}の使用ということを意味する進歩した状況のもとでは、「労働の全生産物はつねに労働者に属するとはかぎらない。彼は、多くの場合、彼を雇用する資本^{ストック}の所有者とそれを分けあわなければならない……」, 「どんな国でも、その土

- 地がすべて私有財産になってしまうと、地主たちは、他のすべての人々と同じように、自分たちが種子をまきもしなかった場所で収益を得たがり、土地の自然の生産物にたいしてさえ地代を要求する。」(W. N., p. 49. 大河内訳<I>84ページ。) Ambirajan [1959], p. 100.
- 20) アムビラヤンによれば、企業家をそのように「企業家」(*entrepreneur*)と命名したのはのちのJ. B. セイであったけれども、スミスは「企業家」の存在を暗に示していた、とされる。Ambirajan [1959], p. 101.
- 21) Ambirajan [1959], pp. 100-101. なお、以上でみてきたアムビラヤンの指摘からして、アムビラヤンがスミスの議論における価値尺度と言う場合、そこでは「価値の測定の問題」と「価値の決定、規制の問題」との区別、関係といったことは問題にされず、アムビラヤンは、スミスの議論における価値尺度の問題を、価値の測定と同時に価値の決定、規制の問題としてとらえている、といえる。あるいは、アムビラヤンにとっては、価値の測定と価値の決定とは同じ問題であり、それは価値尺度の問題であった、ともいえる。

(5) R. ルカッチマン (1959)

ルカッチマンによれば、スミスは『国富論』第1篇第4章の末尾において価値の問題に到達し、水とダイヤモンドの価値のパラドックスにふれたのち、交換価値の問題に専心してとりかかることを、すなわち、交換価値はどのようにして測定されるか、またその構成部分は何であるか、さらに、何故に市場価格はときとして自然価格すなわち真の交換価値を上回ったり下回ったりするのかという問題に専心してとりかかることを、約束したのであり、そして第1篇の残りの諸章はスミスの価値理論の中心部を含んでいた、とされるのであるが、ルカッチマンは、それからの諸章で展開されているスミスの議論についての検討の一部として、つぎのような指摘をなしている。

①スミスは、「資本の蓄積と土地の占有にききだつ初期未開の社会状態」では、当該商品と交換されるところの商品の生産に必要な労働量が、その当該商品の価値を決定するとしたのであるが、他方、資本が蓄積され土地が占有されるようになると資本家と地主という社会の所得にたいする二つ

の追加的な要求者が出現するため、労働者はもはや全生産物にたいする全面的な権利を享受しないこととなるが、それでもなおすべての種類の所得の真実価値すなわち賃金、利潤および地代の真実価値は「そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって」(W. N., p. 50. 大河内訳< I > 85ページ。)測定される、とした。²⁴⁾

②また、スミスによれば、市場が異なった種類の熟練についておおよその調整をなすのではあるが、大体のところ、1時間の労働は、それがいつ、また、だれによって、実行されようとも、おなじ1時間の労働なのであった。そして、スミスがこのように考えた理由は平等主義的なものであった。すなわち、彼の言う労働という真の尺度とは、労苦と骨折りつまり休息するよりも働くことに伴う実際の苦痛といった精神的なものであったのであり、そして、人々はお互いに異なっているよりもヨリいっそうお互いに類似しているために、これらの苦痛は等しくなる傾向がある、というものであった。²⁵⁾

22) Robert Lekachman, *A History of Economic Ideas* (New York: McGraw-Hill Book Co., 1st McGraw-Hill paperback edition, 1976; c1959) —以下 Lekachman [1959] と略記する—, pp. 90-91.

23) Lekachman [1959], p. 91. ただし、ルカッチマンによれば、スミスの労働量による説明自体のなかには、スミスはある生産物を生産するのに必要とされる労働の量がその生産物の価値を決定するということを言おうとしたのか、それとも、当該生産物と交換される生産物を生産するのに必要とされる労働の量がその当該生産物の価値を決定するということを言おうとしたのかといったことにかかわる混乱は存在した、とされる。Lekachman [1959], p. 95.

24) Lekachman [1959], p. 91. なお、ルカッチマンによれば、『国富論』第1篇には、主に未開社会にはあてはまるが他の場所にはそぐわないようにも思われるある純粋な労働量説 (a pure labor-quantity theory), その各々の自然率での賃金、利潤および地代の合計として現実の価格が説明される生産費説、そして、供給および需要という力に基づく市場価格理論 (a market-price theory) という三つの価値理論が含まれており、そしてスミスはこれら諸理論のあいだを揺れ動いただけでなく、彼はまた、ときとして同一章句のなかで、彼の価値理論を、価格の基本的な傾向の説明と価格の変化の測定という二つの異なる目的のために、使用しようとしたのであり、また、純粋な労働量説を放棄してしまったあとでさえ、労働は利潤および地代

の価値を測定するかもしれないという望みに執着した、とされる。Lekachman [1959], p. 95.
25) Lekachman [1959], p. 91.

(6) D. F. ゴードン (1959)

他方ゴードンは、マルクスも、また、古典派の時代のいかなる主要な経済学者も、現代の語法で「労働価値説」とよばれるものはもって²⁶⁾いなかったけれども、²⁷⁾スミス、リカードウ、マルクスという三人の最も著名な労働(価値)説論者と言われる人々は労働(価値)説という用語のそれとは異なったしかもまったく明確な意味で、労働(価値)説と正確によばれるものをもっていた、ということを示そうとするのであるが、²⁸⁾その議論の過程でゴードンはつぎのような指摘をなしている。

①スミス、リカードウ、マルクスらのもっていた労働価値説すなわち「絶対価値の労働説」に共通する考えは、ある絶対的な数が、なにか他の経済財には関係なく、すべての経済財に付されうる、ということ、そして、これらの絶対的な数は、その商品が購買する労働時間であるかまたはその商品が「包含する」労働時間である、ということである。したがって、「絶対価値の労働説」とよばれてもよいものを解釈するさいには、これらの数と、交換比率によって表わされるところの関連はするけれどもまったく別な数の組み合わせ、とのあいだの区別をなすことが、非常に重要である。²⁹⁾また、これらすべての労働価値説は規範的な提案であるということ認識することは、たぶん、ヨリ重要なことでさえある。すなわち、それらの説は、その主張者たちが意識していようが意識してまいが、あの哲学上の立場をもっているのである。ただし、それらの説は、すべての生産物は労働者のものになるべきだということをとくに唱道しているといった単純な意味で規範的であるのではなく、社会会計の単位についてのすべての提案は規範的なものであるというヨリ一般的な意味で、規範的なものなのである。³⁰⁾

②『国富論』では、絶対価値というこの考えは、第1篇第5章において展開されている。すなわち、スミスは、この章において、とりわけ、すべての商品にたいしてある絶対的な数——その商品を購入するのに必要とされる労働時間の量——をあてがうことを提案している。そしてスミスがそうしたことの根拠は、1時間の労働の苦痛費用あるいは心理的不効用にはある一定の不変性が存在する、ということであった。³¹⁾

③スミスは、商品の絶対価値を、通常、「^{リアル・プライス}真実価格」とよび、ときとして、「^{リアル・バリュー}真実価値」とよぶのであるが、スミスにとっては、この絶対価値は、現代の厚生経済学がなしているのと幾分似かよった機能をはたしている。すなわち、この絶対価値は、スミスをして、個人あるいは社会が時および場所の移りかわりをつうじて暮らし向きが向上しているか否かを査定することを、可能にするのである。³²⁾

④「絶対価値の労働説」とは、なんらかの経験的な関連性をもつ厳密に定義されたモデルにおいて価値の解明を論理的に導き出そうとするものではない、それゆえ、そのような「絶対価値の労働説」のなかに現代の相対価格理論に代わるものを見出そうとする試みからは、大きな混乱が生じうる。スミス、リカードウ、マルクスの「絶対価値の労働説」というこれらすべての三つのケースにおいては、経済財に絶対的な数をあてがうのは、³³⁾価値判断を含んだ数字上の比較をなすという目的のためであった。

⑤「絶対価値の労働説」は、社会会計に関する単位についての他の提案と同様に、³⁴⁾価値判断を含む規範的な性格をもつのであるが、「絶対価値の労働説」の規範的性質は、その主唱者たちによって提出された弁護の性格のなかにはっきりと見られる。たとえば、スミスは、労働時間は労働者にとってはつねに等しい価値をもつと「言うことができよう」ということを主張しうるにすぎないのであり、彼は、苦痛費用という我々の直感的な感じに訴えることへとすすみ、そして、ヨリ詩趣に富んだ言説をもって彼の所説を引き続き述べるのである。³⁵⁾

⑥我々は、通常の意味では、これらの労働説の「妥当性」を論議するこ

とはできない。しかし我々は、それらのものを我々自身の直覚的な判断と比べることはできる。1時間の労働は、不努力をつうじてにせよそうでないにせよ、ともかくも、ある不変な大きさの精神的なウェイトをもつと考えられてもよいという労働説に関するスミス³⁶⁾の見解は、現代世界のことさら深く思考することのない常識によって広く受け入れられており、また、学識者でさえつぎのような考えに、すなわち、これこれの数の諸商品について1時間の労働が1900年に購買したよりもはるかに多くのものをおなじく1時間の労働が購買するという事実のなかにはなんらかの規範的な意義が存在するのだという考えに、抵抗するのは困難であるということを知っている。現代の人々も、スミスとともに、1時間の労働の購買力というものが一つのヨリ意味のある変数であると感じざるをえないのである。³⁷⁾

26) ゴードンによれば、「価値理論」(“theory of value”)という語句の現代の意味によれば「労働価値説」とは、おそらくつぎのような命題すなわち、諸商品は、もし必要とあらば石器時代にまでさかのぼっての資本財の創造に必要とされた労働量をも含めて、それらの商品の生産に必要とされた労働量の逆数となる比率で交換される、という命題をさす、とされる。そしてゴードンはこの命題を、「相対価格の労働説」(“the labor theory of relative price”)とよぶ。Donald F. Gordon, “Studies in the Classical Economics: What Was the Labor Theory of Value?”, *American Economic Review* (Supplement), vol. 49 (no. 2, May 1959) ——以下 Gordon [1959] と略記する——, p. 462. それにたいしてゴードンは、スミス、リカードウ、マルクスがもっていたものとしての労働価値説を「絶対価値の労働説」(“the labor theories of absolute value”)とよぶ。Gordon [1959], pp. 466-467.

27) それについてのゴードンの説明については、Gordon [1959], pp. 462-466 を見よ。

28) Gordon [1959], p. 462.

29) ゴードンによれば、このことは、スミスの議論のなかでみられるような二つの絶対的な数のあいだの比率が必然的にある交換比率に等しいといったケースにおいてさえ、真実である、とされる。Gordon [1959], p. 467.

30) Gordon [1959], pp. 466-467.

31) Gordon [1959], p. 467. なお、スミスがそうした根拠を示すものとしてゴードンは、『国富論』のつぎのような文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものということができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態、また彼の熟練と技能が通常程度であ

れば、彼は、等量の労働にたいしてはつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一量を犠牲にしなければならない。彼が支払う価格は、それと引換えに受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働が購買するのは、これらの財貨のうちより大きい分量のこともあれば、より小さい分量のこともあろう。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。」(W.N., p. 33. 大河内訳<I> 57—58ページ。) Gordon [1959], p. 467.

32) Gordon [1959], p. 467. リカードウおよびマルクスの議論についてのこのような観点からのゴードンの検討については、Gordon [1959], pp. 467-470 を見よ。

33) Gordon [1959], p. 470. なお、ゴードンによれば、たとえばこんにちの国民生産物のような社会会計のいかなる単位も、同じような価値判断を含んでいる、とされる。そしてそれに関連してゴードンはつぎのような説明を示している。それによれば、生産物とはその最も「物的」な側面だけにおいてさえ、さだかでない問題を含んでいるのであり、そして、我々がある経済の総生産物を計算するためのルールを提案するときには、我々は、さまざまな諸構成要素——つねにまったく多くの物的な内容をもつ諸構成要素——にたいする価値ウエイトを、提案しているのである。ウエイトとして相対価格を使用するといった現行の慣行は、我々が頑固にしかしまぎらわしく物的生産物とよぶものに到達するための、ありうる多数の「もっともらしい」規範的諸提案のうちの一つの提案にすぎないのであり、「絶対価値の労働説」も一つの別の提案なのである。Gordon [1959], p. 470.

34) ゴードンはつぎのような説明を加えている。それによれば、価値的あるいは規範的諸提案の根本的な哲学上の立場に深く立ち入らなくとも、それらの提案は非規範的な諸公理から厳密に演繹されることもできなければ、また、通常の意味において、いかなる経験的根拠もそれらの提案に関係づけられることもできないということは、明らかである。ところで、論理的・経験的伝統に染まりそして心のうちに現代の相対価格理論の、経験的一般法則とすっかりした定理をもちつ諸労働(価値)説にアプローチする現代の批評家たちは、それらの労働(価値)説を混乱の絶望的な寄せ集めとしてしりぞける傾向がある。またヨリ同情的であったとしてさえ彼らは、労働価値説のなかには大きな形而上学的要素が含まれているのではないかと疑う傾向がある。これはたしかに真実である、ただし、工業生産指数も同様に形而上学的要素をもつというのと幾分同じ意味で、真実なのである。Gordon [1959], p. 470.

また、リカードウの絶対価値概念についてのM.ブローグの「しかしながらこのことのうちには形而上学的なものは何ら存在しない。絶対価値は単に社会会計の一つの単位にすぎない」[Mark Blaug, *Ricardian Economics, A Historical Study* (New Haven: Yale University Press, 1958), p. 36. 馬渡尚憲、島博保訳『リカッ

ドウ派の経済学——歴史的研究——』, 木鐸社, 1981年, 58ページ。] という所見にたいして, ゴードゥンは, むしろ, 「このことのうちには形而上学的な何かが存在する。というのは, それは社会会計の一つの単位であるからである」と言うべきである, としている。Gordon [1959], p. 470 n. 16.

- 35) Gordon [1959], pp. 470-471. リカードウ, マルクスについては, Gordon [1959], p. 471 を見よ。

なお, ゴードゥンによれば, 相対価格についての論理的・経験的な理論と絶対価値についての規範的な理論とのあいだの本質的な相違を明らかにできなかったということが, スミス, リカードウさらにマルクスの議論についての諸評釈における混乱のひとつの大きな原因であった, とされる。たとえば, スミスは一つの事象に関して労働費用説 (a labor cost theory), 労働支配説 (a labor command theory) および生産費説 (a cost-of-production theory) という三つの理論をもっていたということで, 批評家たちによって非難されてきた, だが実際には, スミスは, 相対価格については, 相対価格についての未開モデルおよび相対価格についての文明化された生産費モデルといったもっと具合の良い明確なものをもっているのである, とされる。Gordon [1959], p. 471.

リカードウ, マルクスに関しては, Gordon [1959], pp. 471-472 を見よ。

- 36) これについてはゴードゥンはつぎのような説明を加えている。すなわち, もしそうでなかったら, 我々がこんにち見せられているように, ソビエト連邦と合衆国においてパン—かたまりあるいは靴一足をかせいで得るのに必要とされる分数を示す表といったものを見せられるようなことはなかったであろう (そしてまた, もし我々が諸商品の選択において過度に不注意ではないとすれば, その表は, 合衆国のほうが暮らし向きがよいということを我々に示している)。Gordon [1959], p. 472.
- 37) Gordon [1959], p. 472.

(7) M. ブローグ (1959)

最後に, 1959年に発表された研究においてブローグは, 『国富論』を偏見なく読めば, スミスが労働価値説を定式化しようとしたが商品の労働購買力とその商品の生産に体化された労働量とを混同し生産物の労働価格と生産物の労働費用という全く別の事柄を同一視したという見解が誤りであることがわかるとし, そして, スミスは価値の尺度と価値の原因とのあいだの相違に十分に気づいていたのであり, また, スミスは価値の原因にはあまりかかわりあわず, なんらかの時点における相対価格がなぜその

ようなものであるのかといった価値理論の伝統的な問題はただ手短な取扱いを受けただけであり、スミスはむしろ実質所得の不変の尺度を発見することに³⁸⁾関心を怠っていたのだ、とする。そして、ブローグは、この尺度についてのスミスの議論すなわち「労働という測定尺度」についてのスミスの議論は、こんにち適切にも、指数問題を克服しようという努力を含む主観的厚生経済学 (subjective welfare economics) へのひとつの企てとみなされているが、従来のところ、スミスの^{スタンダード}厚生標準を議論するにさいして概略的なものをこえて進んだ批評家はほとんどいない、として、³⁹⁾このような視点からスミスの議論を検討しようとする。そこで、以下の〈補記〉において、このようなものとしてのブローグの検討をみておくこととする。

〈補 記〉

ブローグによれば、スミスは、労働^{スタンダード}標準を、資本蓄積率の^{インデックス}指標と主観的所得の大きさの^{インデックス}指標という二つの別個な意味で使用し、そしてスミスの議論は、発展しつつある経済においてはこの二つの指標は同一のものになるということを示すことに向けられている、だが、それらの二つの指標がそのような⁴⁰⁾ようになるのは、スミスの諸仮定のもとにおいてのみである、とされる。

まず、ブローグは、資本蓄積率の指標としての労働標準というスミスの考えを、つぎのようなものとして示している。それによれば、そこでのスミスの考えは、資本蓄積は賃金単位（不熟練労働の現行貨幣賃金率）で表わされた国民生産物の貨幣価値におけるある明確な趨勢を伴う、というものである。すなわち、『国富論』第2篇第3章において、「生産的労働」は、生産の次の^{サイクル}周期においてヨリ多くの労働を稼働させることができるころの蓄蔵可能な富の諸品目とくに賃金財を生産する活動として、定義されている。このことは、すべての価値を現行の賃金単位で測定すれば、生産的労働は、それに体化された労働の価値をこえる価値をもった物的産物を生産するということ⁴¹⁾を、言っているのである。もちろんこのことは、そのような労働は通常、その維持および置換の費用をこえる価値余剰

(value-surplus) を産み出すということを言っているにすぎない。さて、もしこの「純収入」(“net revenue”) がつねにすみやかに再投資されそして労働の供給が完全に弾力的であるならば、総産出高によって支配される賃金単位数の上昇傾向は保証される (W.N., p. 54. 大河内訳< I >92ページ)。資本と労働とは固定的な割合で結合される (W.N., p. 421. 大河内訳< II >116ページ。) のであるから、雇用量は、資本の増加と同一歩調で増加するであろう。実質賃金が一定であれば、産出高の増大は、労働指標 (labor-index) の正の傾向ということになるにちがいない。スミスは、増大する労働力は増加する実質所得の「決定的なしるし」であるということ⁴²⁾を、言いたかったのである (W.N., p. 70. 大河内訳< I >119ページ。)

つぎにブローグは、主観的所得の大きさの指標としての労働標準というスミスの考えを、つぎのようなものとして示している。それによれば、スミスは一方で、「初期未開の社会状態」という状況のもとにおいて実質所得をどのように測定するかという問題を提出している。事実上この状況は、生産物に体化された個人的労働がこれらの生産物の購買しうる労働と一致するといった単一要素世界である。そのような状況のもとにおいて、人は、彼自身の労働用役の価値に応じてあるいは他の人々の労働にたいする彼の購買力に応じて、「富んでいたり貧しかったり」ということとなる、というのは、それら二つのものは等しいからである。ところが財産所得の発生とともに、この一致は破られる。いまや、実質所得は、他の人々の生産物にたいする支配力とともにのみ、変化する。しかしながら、労働はめんどうなものであるため、すべての人は、「労苦と骨折り」からのがれてそれを他の人々に課そうと努める (W.N., p. 30. 大河内訳< I >52—53ページ。)。ある意味で、生産物でもって購買されるものは、他の人々の「労苦と骨折り」なのである。またそれゆえ、実質所得の増加は、財貨にたいするヨリ大きな購買力だけでなく労働にたいするヨリ大きな購買力をも、意味するのである。個人の所得について真であることは、総計としての所得についても真である。すなわち、一国の富 (所得と解釈

せよ)は、その全体としての生産物によって支配される賃金単位数によって測定されるのである。⁴³⁾

ブローグは、以上がスミスの議論の骨子でありそしてそこでは、資本蓄積は、労働指標における正の変化をひきおこすことによって、主観的厚生における増加ということになるとされている、とするのである。⁴⁴⁾そしてブローグは、スミスの議論を以上のようなものとして把握したうえでその議論に関してつぎのような諸点を指摘している。

①測定の標準は、測定されるものの変化を正確に表わすためにはその標準自体が不変なものでなければならない。ところが一見したところ賃金単位はこの条件を満たすことができない。すなわち賃金単位は、賃金財の価格や労働の需・給におけるすべての変化とともに変動するのである。⁴⁵⁾

②だがしばらくの間、かりに、貨幣賃金および実質賃金が変わらないままに留まるとしよう。その場合、どのような意味で、賃金単位が主観的厚生の不変の標準を提供するのであろうか。明らかにつぎのような意味においてである。すなわち、我々はさらにまた、^{エフオート}努力1単位当りの労働の平均的不効用はいかなる時にもすべての個人にとって不変であると仮定できる、という意味においてである。すなわちスミスは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい〔尊重〕価値をもつものといふことができよう」(W. N., p. 33. 大河内訳< I >57ページ。〔 〕内はブローグ。)と、言うのである。⁴⁶⁾この仮定はたしかに大胆な仮定である。人・時当り主観的犠牲の不変な支出ということは、^{エフオート}努力供給の弾力性1あるいは^{エフオート}努力タームでの所得への需要の弾力性1を、含意しているのである。これは、長期における厚生評価に関する分析にとっては、まずい仮定である。というのは、成長しつつある経済において所得の^{エフオート・プライス}努力価格が低下しつつあるということそれ自体が、厚生の改善におけるひとつの主要な要素であるからである。⁴⁷⁾

③だが、スミスのこの大胆な仮定を認めるとしよう。ところで、その場合にも、所得の努力価格は、使用可能な測定標準のタームで表現されなけ

ればならないのであるが、このことには二つの難事が存在する。その一つは、代表的な貨幣賃金単位を選ぶというものであり、もういっぽうは、実質賃金を表現するために安定的な価値係数を選ぶというものである。第一のものに関連しては、スミスは、相対的な賃金についての章（『国富論』第1篇第10章）において、異なる職業の時間当り賃金率における相違にもかかわらず完全競争が、労働の不効用の諸単位にたいする貨幣収入を平準化する傾向をもつということを示している。市場が、さまざまなタイプの労働をある共通の標準^{スタンダード}に還元するのである。したがって、原理的には、代表的な貨幣賃金単位は設定されうるのである。⁴⁸⁾第二のものに関連しては、スミスはつぎのような議論を示している。すなわち、銀の価値は「年から年へかけては」さらに「半世紀または1世紀間」でさえ相対的に安定しているから、適度のながさの暦年期間については、銀表現での名目的な賃金単位で十分であろう（*W. N.*, p. 36. 大河内訳< I >62ページ）。しかし、もっとながい期間については穀物賃金単位がヨリ適している。たしかに穀物価格は短期では鋭く変動ししかも貨幣賃金と同じ方向にか同じ振幅で変動することはまれであるが（*W. N.*, pp. 36, 74, 75, 83, 85. 大河内訳< I >62, 124—127, 140—142, 145—147ページ。）、「世紀から世紀にかけては」穀物価格はいちじるしく安定的である（*W. N.*, pp. 36—37, 477, 482. 大河内訳< I >61—62ページ, 大河内訳< II >210—211, 218—220ページ。）のであり、そしてその理由は、費用を低落させるような農業上の諸改良が「農業の主要な用具」である家畜の価格の騰貴によって「多かれ少なかれ相殺される」からである（*W. N.*, pp. 187, 219—224, 240. 大河内訳< I >309, 355—364, 388—389ページ）。しかも、穀物は「人々の基本的な生活資料」であるから、穀物の貨幣価格は長期では貨幣賃金を支配するすのである。「世紀から世紀にわたる場合は、銀よりも穀物のほうがすぐれた尺度である。というのは、世紀から世紀にかけては、等量の穀物のほうが等量の銀よりも同一量に近い労働を支配するからである」（*W. N.*, pp. 37, 187, 476. 大河内訳< I >63, 309ページ, 大河内訳< II >209—

210ページ。⁴⁹⁾。議論は完全である。(長期では,)リアル・タームでの賃金単位すなわち穀物ではかられた普通労働の賃金も,貨幣タームでの賃金単位も,時間をつうじて不変的であり,そして,労働の不変的な不効用を表わすのである。⁵⁰⁾

④しかしながらスミスは他方で,「時と場所のいかんを問わず,わずかな労働で入手できるものは安価である」ということを疑わなかった。そうだとすれば,人・時当り産出高が上昇するにつれて,財貨の「^{リアル・プライス}真実価格」は穀物と比べて相対的に低下することとなるであろう,そしてそのことは,それらの財貨はヨリ少ない労働しか支配しないであろうということの意味しているのである。同様に,年々の総生産物によって支配される賃金単位の数も低下する傾向をもつこととなるであろう。諸商品によって支配される労働は,実質所得にたいして労働がもつ購買力と逆の関係にあるのであるから,このことは十分に筋道がたっている。ところがこの線にそった推論は,主観的厚生のスミスの正の指標と全く矛盾することになる。そしてその矛盾は,スミスのその正の指標は不変の実質賃金と技術進歩にたいする不変の収穫とを仮定しているという事実⁵¹⁾に,帰因しているのである。

⑤リカードウ流に言えば,厚生の増加とは「富」(“riches”)の増加を意味するかもしれないあるいは「価値」(“value”)の低下を意味するかもしれない。そして,「富」の増加のひとつは,こんにち我々が「資本拡張」とよぶものすなわち資本係数不変のままでの資本と労働の比例的増進による産出高の増加であるのにたいし,「価値」の低下とは,労働の平均生産性の上昇を,あるいはスミスの言葉で言えば,産出物1単位当り支配される労働の量の減少を,表わしている。なお,リカードウは「富」それ自体は経済的厚生にとって筋違いのものとしてかたづけたのであるが,スミスもリカードウもともに「価値」を労働の平均生産性の逆指標としてしたがってまた経済的厚生の逆指標として取り扱っているという点では,本質的には,一致している。しかし,リカードウが厚生を産生物1単位当りの人間努力を極小化する問題とみなしているのにたいし,スミスは厚生を,実

質所得にたいする労働の潜在的購買力を極大化する問題とみなしているのである。そしてスミスの標準は、その標準がヨリ明示的に主観的所得に結びつけられているというまさにその理由のゆえに、ヨリ多数の疑わしい仮定に依存している⁵²⁾のである。

⑥適切に理解されさえすれば、スミスの労働標準にはどこもぐあいの悪いところはない。ぐあいの悪いのは、ただ、スミスがそれを乱雑に適用したということだけである。実際のところ、いままでにも指摘されてきたように、一人当り経済的厚生⁵²⁾の国際比較を行うための現代の諸方法は、スミスの厚生経済学の応用以外の何物でもないのである。たとえば、ソビエトの生活水準とアメリカの生活水準は、その二国のおのおのの時価で特定の物品を買うためには現行の率で報いられるどれほどの労働時間が必要とされるであろうかをたずねることによって、比較されるかもしれない。このような手続きは、なかんずくソ連邦における労働の不効用はアメリカ合衆国におけるのと同じであると仮定しているのである。あるいはまた、実質所得は、一定のドル価格で評価されたある所与の賃金財バスケットのタームで、比較されるかもしれない(コーリン・クラークの国際単位)のであり、これもまた同様な諸仮定を含んでいるのである。なお、いかなる人も、確かな見解が経済的厚生に関して形成されうるに先だってこれらの方法は労働の生産性の比較および資本の生産性の比較——さらに、人的所得分配 (<personal income distribution> これは、古典派の経済学者たちが全く看過したところの厚生の一つの局面である) の比較——によって補充されるべきである⁵³⁾ということ、否定しはしないであろう。

38) Mark Blaug, "Welfare Indices in *The Wealth of Nations*", *Southern Economic Journal*, vol. 26 (no. 2, October 1959) ——以下 Blaug [1959] と略記する——, p. 150. なお、ブローグは、『国富論』における諸論題の配置順序はスミスの目的についての誤解をまねくこととなった、ということ⁵³⁾を指摘している。すなわち、第1篇第4章は「財貨の相対価値または交換価値」の決定を分析することを約束して終わっている、しかしそれにつづく第5章はそれよりもむしろ、貨幣価格の変化を評価するための異時点間の標準^{スタンダード}を明らかにすることを試みており、資本は過去に支出された労働に還元されうるという考えを受け入れずに単純な生産貨幣費用説 (a

- simple money-costs of production theory) で終わっている第6, 第7章までは相対価格の決定は議論されない。そして、第6, 第7章からのこの結論も第5章で提示された「労働物差し」(labor-yardstick) には影響を及ぼしはしない、だが、もし第5章が第6, 第7章の先にはなくそれらの後にあったならば、以上のことはもっとはっきりしていたであろう、というのである。Blaug [1959], p. 150.
- 39) なおブローグによれば、ミントの分析 (Hla Myint, *Theories of Welfare Economics* <n. p.: London School of Economics and Political Science, 1948; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1962 & 1965>, chap. 2. なお、ミントの所説については、拙稿『「アダム・スミスの価値尺度論」についての海外における諸研究<4>——1940年代——』『広島経済大学経済研究論集』第4巻第4号, 1982年2月のミントの項も見よ。) はひとつの注目に値する例外であるとされるのであるが、同時にそれもまたつねに不明確さのないものであるというわけではなかった、とされる。Blaug [1959], p. 150. (ブローグはさらに、これに関連して、ミントの研究のほか、我々がすでに本稿およびそれにききだつ諸稿でみた M. ポウレイ, J. A. シュムペーター, および, H. M. ロバートソンと W. L. テイラーの所説を参照するよう指示している。Blaug [1959], p. 150 n. 2.)
- 40) Blaug [1959], p. 150.
- 41) なお、ブローグによれば、サービスは非耐久品であるため蓄積されえないということから物的産出物のみが考えられている、とされる。また、ブローグによれば、知識の伝達という重要な例外をとめないながらもこのことは確かに本当である、しかし、それがどのような重大な影響を及ぼすかということは、別の問題である、とされる。Blaug [1959], p. 151 n. 3.
- 42) Blaug [1959], pp. 150-151. なお、このことにたいしてブローグはつぎのような指摘をくわえている。すなわち、しかしながらスミスは他方で、「労働の報酬がよいということ」は増加する実質所得の「必然的結果」、「自然的徴候」であるということも、言いたかった (*W. N.*, p. 73. 大河内訳<1>124ページ)。だがこのことはひとつのジレンマをつくり出す。すなわち、実質賃金が上昇しつつあるときには、正の投資率は必ずしも賃金単位にたいする総産出高の購買力における増加を意味するわけではないのであり、事実、もし実質賃金が労働の平均生産性と同一速度で上昇するならば、労働標準は、経時的にいかなる変化をも示しはしないであろう。Blaug [1959], p. 151. (なお、この難点については、ブローグは、のちほどみるスミスの議論において暗黙裡になされている諸仮定に関する検討のなかで立ち戻って言及している。)
- 43) Blaug [1959], p. 151.
- 44) Blaug [1959], p. 151.
- 45) Blaug [1959], p. 151.

- 46) ブローグによれば、ひとたびこのことが認められれば、労働が一時的にヨリ多くの賃金財を受け取る場合には、「変動するのはそれらの財貨の〔尊重〕価値であって、それらを購入する労働の〔尊重〕価値ではない」(W. N., p. 33. 大河内訳< I > 57—58ページ。〔 〕内はブローグ。)ということが言われうるのであり、非常に多くの評釈者たちを困惑させてきたこのスミスのことばは、その文脈においては完全に論理的なのである、とされる。Blaug [1959], p. 151 n. 6.
- 47) Blaug [1959], pp. 151-152.
- 48) Blaug [1959], p. 152. ただし、ブローグによれば、この議論にたいしては、賃金構造が経時的に硬直的であるか否かということが問題となりうるのであり、この視点からの反論は可能である、とされる。Blaug [1959], p. 152 n. 7.
- 49) ただし、ブローグは、『国富論』の「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」の全体は穀物賃金の長期的不変性という考えを正当化することに向けられてはいるが、これが、けっして単純化のためのひとつの仮定ではないといえるかどうかを判断することは困難である、とし、そして、つぎのような指摘をなしている。すなわち、スミスはある箇所、規則正しく記録された穀物価格の時系列データと比べて貨幣賃金についての時系列データが非常に不足しているということについて述べており、そしてスミスは、この事実のゆえにのみ我々は「労働の時価とつねに正確に同一割合にあるからというのではなく、ふつう入手できるもののなかでは、その割合にいちばん近似的なものであるという理由から」穀物価格にたよらざるをえないのだということを示唆している (W. N., p. 38. 大河内訳< I > 65—66ページ。), というのである。Blaug [1959], p. 152 n. 8.
- 50) Blaug [1959], p. 152.
- 51) Blaug [1959], p. 152. なお、ブローグはつぎのような指摘を加えている。すなわち、実際には、スミスは、人口増加は分業の範囲を拡大することによって一人当たり産出高を高めるであろうということを感じていた。そしてこの傾向それだけでも、産出高へのあらゆる追加はヨリ少ない追加的賃金単位しか支配しないであろうということを、ほのめかしているのである。Blaug [1959], p. 152.
- 52) Blaug [1959], pp. 152-153. ブローグはつぎのような説明をくわえている。それによれば、たとえばもし実質賃金が時間をつうじて変化するならば、スミスの全議論は崩れ去ってしまう。また、たんに貨幣賃金が上昇してしまったために諸商品はヨリ少ない労働しか支配しないかもしれないし、あるいは、賃金財の価格が低下してしまったために諸商品はヨリ少ない労働しか支配しないかもしれない。ところが、それから結果として生じてくる、投資へのしたがってまた総産出高によって支配される賃金単位の趨勢への、影響は、この二つの場合において非常に異なるであろう。この難点は、実質賃金と貨幣賃金との両方が長期において不変に留まる傾向があるときのみ、消え去るのである。Blaug [1959], p. 153.

なお、ブローグによれば、いままたこのことが、スミスへのリカードウの不同意の根源である、とされる。このことに関するリカードウのスミスへの批判およびそれについてのブローグの論評については、Blaug [1959], p. 153, p. 153 n. 10 を見よ。なお、そこには、つぎのようなブローグの指摘が含まれている。すなわち、リカードウの体系においては、資本蓄積は穀物価格の上昇をまねき、実質賃金は不変に留まるが貨幣賃金は穀物価格とともに上昇し、そしてこれが地代の上昇と利潤の低下を引きおこす、とされているのであり、そしてリカードウは、「スミス博士の全著作をつらじでの誤謬は、穀物の価値は不変であると想定していることにある」〔David Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation (The Workes and Correspondence of David Ricardo, edited by Piero Sraffa, Vol. 1* <Cambridge: Cambridge University Press, 1951>), p. 374. 堀経夫訳『経済学および課税の原理』(P.スラッファ編『デイヴィッド・リカードウ全集』第1巻, 雄松堂書店, 1972年), 430ページ。], としてスミスを批判する。しかしながら、「世紀から世紀にかけての」穀物価格の安定性ということへのスミスの確信は、1815年の穀物法といったような政策手段についての分析とは関係のないものであったのであり、結局のところ、リカードウの目的はスミスの目的ほど野心的なものではなかったにもかかわらず、リカードウは、スミスがリカードウ的な問題とかかわり合っていたと仮定することによってスミスの標準にたいして筋違いの批判をなしたのであり、彼は、スミスの標準は長期的な比較のためにしかもたいへんな長期のために使用されるよう意図されているのだという事実を、無視しているのである。

53) Blaug [1959], p. 153.

結びに代えて

以上、1950年代に発表された「アダム・スミスの価値尺度論」に係するE.ジャム, H.M.ロバートソンとW.L.テイラー, L.ロビンズ, S.アムビラヤン, R.ルカッチマン, D.F.ゴードン, M.ブローグの所論をみてきた。

以下では、それらの所論の特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まず、ジャムによれば、スミスは労働のみがそれ自身の価値において変動することがないとして労働を最善の価値尺度としたのであるが、これは、18世紀のあまりにも熱心な金属主義者たちすなわちスミスが可変的尺

度を推奨していると非難した人々、および小麦を基本の尺度とみなそうと考えている人々にたいする附随的な答弁なのであった、とされるのであった。なおそのさい、ジャムは、価値尺度についてのスミスのこの議論を「価値の原因、価値の決定」についてのスミスの議論とは別のものとして、取り扱うのであった。

つぎに、ロバートソンとテイラーは、『国富論』におけるスミスの関心は諸国民の富の変動の原因についての長期的な説明、物質的厚生にたいする社会および社会的諸制度の影響の研究、一人当たり実質国民所得を決定する諸原因の究明といったことに向けられていた、とみ、そして『国富論』における(交換)価値の尺度についてのスミスの議論を、諸国民の「富」およびその変化をリアル・タームで測定して経時的な確固たる比較を可能にするような不変の価値標準スタンダードの問題についての議論とみるのであった。そしてロバートソンとテイラーによれば、スミスはこの問題に関して、貨幣よりも穀物で長期の計算をするほうが、穀物のほうがヨリいっそうそれ自体の価値の安定性を維持しそうであるという理由から、ヨリ好都合であるとしたのであるが、不変の価値標準を見つけ出すというこの問題にたいする解答としてスミスは労働の不効用に関する不正確な仮定に基づきつつ「労働」を、しかも、「支配される労働」を全面的に支持した、とされるのであった。またロバートソンとテイラーによれば、たしかに、労働者にとっての彼の労働の不効用、真実費用は不変であるというスミスの仮定のもとでは「支配される労働」は価値の標準尺度でありうるかもしれない、しかしそれは、価値の決定を説明しうるものではない、ところが、スミスは別の道すじで「労働」を正常な価値ノーマルあるいは「自然的な」価値の問題に結びつけようと試みることによって、「価値の尺度」の問題と「価値の決定」の問題というこれら二つの問題の異なる性質を不明瞭にしてしまった、とされるのであった。さらにまた、スミスの議論はこのような難点をもつとはいえ、彼の「支配される労働」という尺度は実質国民所得の測定のための、あるいは、生産高の変化を厚生の変化と関連づけるための、ひ

とつの土台を提供したのであり、そして、事実、異なった国々における一人当たりの相対的な経済的厚生を測定しようとする現代おこなわれているいくつかの試みは、結局のところ、「支配される労働」というスミスの測定尺度のたんなる洗練化にすぎない、とされるのであった。

また、ロビンズは、「価値の原因、価値の決定」と「価値の尺度」とを別の問題としてとらえ、そして、古典派の議論に関するかぎり価値尺度として労働を使用するという考えは『国富論』にさかのぼるのであるがスミスは彼の尺度を、概念的に別のものである「商品の生産に費やされる労働の量」と「商品が支配する労働の量」という両方のタームで語っており、その意味でスミスによる価値尺度としての労働という考えの展開は、あいまいなものであった、とするのであった。

他方、アムビラヤンは、スミスの価値論を、「自然価格」と「市場価格」に関するものとしての価格決定についての議論と、価格の背後に存在しそして価格によって表現されるものとしての交換価値についての議論とに分けて考察し、そしてさらに後者の問題についてのスミスの議論を、価値の源泉および価値の尺度に関するものとして、とらえるのであった。そしてアムビラヤンは、スミスは価値の源泉および真の尺度を労働に求めたのであるが価値の尺度に関しては、資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態については当該商品の生産に費やされる労働の量を、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態については当該商品によって購買または支配される労働の量を、価値の尺度としている、とみるのであった。なお、アムビラヤンは、前者の考えにたいして「投下労働価値説」という言葉を、後者の考えにたいして「支配労働価値説」という言葉を与え、そして、スミスの議論における「価値尺度」を、価値の大きさの規制、決定ということとかかわりなくたんに価値の大きさを測定するものというよりも、価値の大きさを規制し同時にその大きさを測るものとして、取り扱うのであった。

ルカッチマンによれば、『国富論』第1篇には純粹な労働量説、生産費

説、および、需要と供給に基づく市場価格理論という三つの価値理論が含まれており、そしてスミスはこれらの理論のあいだを揺れ動いただけでなく、スミスはまたときとして、彼の価値理論を、価格の基本的な傾向の説明と価格の変化の測定という二つの異なる目的のために使用しようとしたのであり、また、純粹な労働量説を放棄してしまったあとでさえ、労働は賃金の価値に加えて、利潤および地代の価値を測定するかもしれないという望みに執着した、とされるのであった。そしてまたルカッチマンによれば、スミスは異なった種類の熟練についての市場におけるおおよその調整ということに言及しているのではあるがスミスが労働を真の尺度とする場合、そこで言われている労働という尺度は労苦と骨折りつまり休息するよりも働くことに伴う実際の苦痛といった精神的なものであったのであり、そしてスミスは人間相互の異質性よりも類同性を重視することからこれらの苦痛はすべての人間にとって等しくなる傾向があると考え、この意味ですべての労働は大体のところ同じものであるとした、とされるのであった。

また、ゴードゥンは、スミスの議論には、一方で、交換比率、相対価格の決定についての説明に関しては相対価格についての未開モデルと相対価格についての文明化された生産費モデルというはっきりとしたものが存するとともに、他方で、他の経済財には関係なくすべての経済財にはある絶対的な数（スミスの場合には当該財貨を購入するのに必要とされる労働時間の量）が付されうるという考え、絶対価値という考え（『国富論』ではこの絶対価値という考えは第1篇第5章で展開されており、そしてスミスはこの絶対価値を通常、「^{リアル・プライス} 真実価格」とよび、ときとして「^{リアル・バリュー} 真実価値」とよんだ）が存在するのであり、この意味での労働価値説つまり「絶対価値の労働説」は交換比率、相対価格についての労働価値説つまり「相対価格の労働説」と本質的に性質を異にするのであり、それらのものは区別して考えられるべきである、とするのであった。そしてゴードゥンによれば、スミスが財貨にたいしてうえてみたような労働時間の量をあてがうことを提

案したその根拠は1時間の労働の苦痛費用あるいは心理的不効用にはある一定の不変性が存在するということであつたのであるが、スミスにとってはこのような数のあてがわれる絶対価値は彼をして個人あるいは社会が時および場所の移りかわりをつうじて暮らし向きが向上しているか否かを査定することを可能にするといった現代の厚生経済学がなしているのと幾分似かよつた機能をはたしており、財貨に絶対的な数をあてがうのは価値判断を含んだ数字上の比較をなすという目的のためであつたのであり、そして、事実上社会会計に関する単位についての提案を意味するこの「絶対価値の労働説」は、社会会計に関する単位についての他の提案と同様に、価値判断を含む規範的な性格をもつものであつた、とされるのであつた。そしてまた、この性格のゆえに我々は通常の意味ではこの労働説の「妥当性」を論議することはできないが、1時間の労働はともかくもある不変な大きさの精神的なウェイトをもつと考えられてもよいというスミスの見解は、現代においても受け入れられているところがある、とされるのであつた。

最後に、ブローグによれば、スミスが価値の規制、決定を因果的に説明するものとしての労働価値説を定式化しようとしたが商品の労働購買力と商品の生産に体化された労働量とを混同し生産物の労働価格と生産物の労働費用という全く別の事柄を同一視したとみるのは誤りであり、スミスは価値の尺度と価値の原因とのあいだの相違に十分に気づいていたのであり、そしてスミスは価値の原因にはあまりかかわりあわず、なんらかの時点における相対価格がなぜそのようなものであるのかといった価値理論の伝統的な問題はただ手短な取扱いを受けただけであつてスミスはむしろ実質所得の不変の尺度を発見することに関心をいだいていたのだ、とされ、また、スミスは『国富論』第1篇第5章において貨幣価格の変化を評価するための異時点間の標準スタンダードを明らかにすることを試みているのであるがこの第5章で提示される「労働という測定尺度」についてのスミスの議論はこんにち適切にも、指数問題を克服しようという努力を含む主観的厚生経済学へのひとつの企てとみなされている、とされるのであつた。そして、ブ

ローグは、スミスはこの労働標準を資本蓄積率の指標と主観的所得の大きさの指標という二つの別個な意味で使用しておりまたスミスの議論は発展しつつある経済においてはこの二つの指標は同一のものになるということを示すことに向けられている、とするのであるが、同時にブローグは、それら二つの指標がそのようになるのはスミスが暗黙裡にもうけている諸仮定のもとにおいてのみである、とし、そして、そのような視点から、本稿の〈補記〉でみたような形で、スミスの議論を検討するのであった。